



優秀賞

『いま、会いにゆきます』市川 拓司

経済学部経済学科 1年
舩田 壮良

私が紹介する作品は、市川拓司先生の『いま、会いにゆきます』です。この作品は自分にとって大切な人に会いたいと強く思う作品です。主人公の巧は、男手一つで息子の佑司を育てるシングルファーザーです。妻の溺を亡くした悲しみから精神的な不調を抱えながらも、息子のために懸命に日々を過ごそうとしています。ある雨の日、巧が佑司と出かけると、亡くなった妻にとっても似た女性と出会い二人の中で止まっていたものが再び動き出すというのがあらすじです。

私がこの作品で最も伝えたい魅力は、物語上の言葉、表現がとても綺麗なところudur。あらすじで述べた範囲から述べると、妻が亡くなったことを巧は「アーカイブ星」に行ったという風に佑司へ伝えています。「アーカイブ星」とは世界を作った誰かが、亡くなった人が行くための星という設定です。巧の中での「アーカイブ星」は巨大な図書館のような場所で果ての見えないほど広がっているという風に表現されています。私は初め、この「アーカイブ星」という単語を見た時、動画配信でのアーカイブに残すように、亡くなった人の命が保存されているという意味なのかと思っていました。しかし、前述したように「アーカイブ星」は図書館のような場所でそれは命の保存というより、魂の保存、つまり記憶や思い出、その形を保持するものなのではというように解釈しました。このようにこの作品には、「エネルギー切れ」という表現もあり、独特な表現が多く使われていて、そのどれもが頭のなかに心地よく落ちていく言葉だと思います。

市川拓司先生は、他にも愛をテーマにした作品があり、私のおすすめは「そのときは、彼によろしく」という作品です。是非読んでみてください。

